



地元民^よ拠り所の駅

小川郷駅は大正4（1915）年7月、平一^な小川郷が開通した際に開業し、さらに大正6（1917）年10月には、平一郡山が全通して磐越東線となりました。

駅には急行列車が停車し、石炭や頁岩^{せきがん}が運ばれるなど活況を呈していましたが、自動車交通の発達によって旅客・貨物輸送は衰退し、平成元（19



小川郷駅開業100周年記念イベント [平成27（2015）年7月 いわき市撮影]

風景や街の様子、人々の暮らしなどを撮った数多くの写真から、いわきの多彩な歴史・文化・移り変わりなどをひもときます。

89）年3月には無人駅となってしまいました。

こうした状況を打開し小川郷駅を見直そうと「小川郷の駅を明るくする会」が結成されたのは、平成5（1993）年5月でした。定期的な駅清掃やイベントを開催する一方、小川地域振興協議会は駅地下道に地元小中学生が描いた壁画などを展示しました。

こうした駅活性化の活動が地区全体に広がるようになったことから、平成19（2007）年6月に「小川郷の会」へ改称され、同会の活動の一つとして「駅活性化委員会」が設置されました。

以来、駅開設の周年祝賀事業開催はもちろん、七夕飾り、門松飾り、イルミネーション点灯など、節目の催しで駅舎を中心とした地域住民の交流が繰り広げられています。

古い駅舎を中心とした地域活性化は、地域の拠点が真新しいことではなく、どれだけ思いが受け継がれるかであり、その過程で、古さが新しさを呼ぶ可能性があることを示しています。

（いわき地域学會 小宅幸一）

連載シリーズ

※いわき市内の昔の写真をお持ちで提供いただける方は、広報広聴課（☎22-7402）へご連絡ください。

市長です こんにちは⑪

いわきをつくる若者の力！



いわき市長 内田 広之

市長に就任して1年が経ちました。いろいろな課題に向き合う日々ですが、若者流出の問題は特に深刻です。本市の若者は、高卒時点で6割以上が市外に流出し、なかなか戻ってきてくれません。首都圏で専門を学んだ若者には、本市で働ける場が少ないと誤解されがちです。

その誤解を解く事例をいくつか。例えば、市内にはマグロを欧米人のテイストに合うよ

う調理した製品をグローバル展開する企業があります。スマホの化学薬品や自動車ブレーキ部品、バッテリーなど、世界随一の精緻な技術で勝負する企業もあります。

こうした地元企業の多くの魅力を、市と商工会議所とが連携して「見える化」し、若者に伝える取り組みを進めています。

加えてこれからは、若者のチャレンジ支援を強化します。市内には原発の汚染水をためるタンクを製造してきた企業が、新たに風力発電のタワーに進出した事例があります。新たなチャレンジが求められる時代です。宇宙開発につながると言われる廃炉も、大きなビジネスチャンスなのです。

若者へ本市の産業の魅力やチャレンジを伝え支援し、若者の活躍する場をつくり、若者に発展をけん引してもらうことこそが、真の復興です。